慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黒正巌著 経済地理学原論
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.11 (1941. 11) ,p.1428(110)- 1436(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19411101-0110
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19411101-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黒正巖著「經濟地理學原論」

小島榮次

嘗つて「日本經濟地理學」第一分冊（昭和六年刊）「經濟地理學總論」（昭和一二年刊）を著され、斯學理論の建設に貢献される所極めて大なり」黒正博士が、今また「經濟地理學原論」に依つて、一層完成された理論を示されることとなつた。本書は本文約四一〇頁、そのうち約一五〇頁は全く新しく書かれ、舊著の内容を取入れた約二五〇頁も全部書直され面目を新にして居り、文字通りの新著と云ふべく、博士の學問に對する熱意は全く敬服に値する。しかも本邦斯學界に於ける指導的理論家であり乍ら全編にわたつて若々しい情熱を漲らせ、國家的目的の遂行に學問に據つて貢献せんとする强烈な意欲を燃え立たせて居ることは、斯學の進歩發展の爲め眞に慶賀に堪えない。

さて本書は全體が五編に分けられ、先づ第一編「經濟地理學の概念」に於いて斯學の本質を究明し、第二編「經濟地理學研究方法論」に於いては、根本的な指導原理から直接的な作業方法及び研究資料に至るまで論述し、第三編「經濟地域劃定論」（以下第四編「經濟地域構造論」及び第五編「經濟地域編制論」は　經濟地理學的研究の内容に關する理論を展開させる。即ち經濟地域の劃定・經濟地域の個性構造の研究・經濟地域編制研究の三方面の研究の意義とそれに對する指針とを示して居る。

第一編第一章は先づ「經濟地理學の成立過程」を次のやうに說明する。即ち地理學は「空間的概念によつて事物を認識したるものとして生れ」（五頁）たのだが、「自然科學的認識と文化科學的（又は歷史科學的）精神科學的認識との分化を生じ、同一の地表空間を異れる研究方法によつて取り扱ふに至つた」（九頁）が故に、人文地理學（又は文化地理學）の發達があつて地理學は二元的となり、更に「資本主義の發達と共に、排他的國家經濟より自由的世界經濟へ推移し、世界が或る程度に經濟的地域統一體となるに及び、經濟地理學的認識の確立、研究資料の豐富、他の諸科學の異常なる發達に伴ひ、文化活動中の最も主要なる部門としての經濟は地理學の最大關心の集中する所となり、經濟地理學が「獨立の地理學部門として存立する」（二六頁）に至つたことを述べて居る。

而してこゝで注目すべきは、地理學の新なる使命を次の如く論じて居られることである。即ち「地理學はかつて個人的、部分的實利の爲めに研究され、更にそれが現象論的、分布的科學それ自體として研究されたが、今やこの兩者は辨證法的に止揚されて國家の合理的地域的編制を研究するの科學となつたのである。即ち一定の目的のためにする實用的目的論的ではあるが、併し前の低き次限に於けるものではなく、又科學それ自身ではあるが、而かも國家の最高目的を內包するものであつて、超國家的ではなく、全く高き次限に於ける兩者の止揚としての段階に到達したのである」と。（一五頁）これは全く新しい提言であり且つかなり大膽な言葉と云へる。何となれば斯かる國家的目的に斯學の成果が貢献すると云ふのではなく、斯學自體が斯かる目的遂行をその任務とするのである。結局この見地は、經濟地理學を以つて政策學の一つとするものと解される。

第二章「經濟地理學の本質」に於いては、先づ斯學に對して「經濟地理學は經濟的文化の空間的分布的現象形態としての地域的個性を研究する科學である」（三一頁）といふ定義が與へられ、この定義に對して整然たる分析的說明

が下される。これは舊著に於いても私の如き大いに稗益される所のあつた部分であるが、本書に於いては全部書改められ、益々光彩を放つて居る。尙右の定義は、「總論」で與へられた定義「經濟地理學は經濟的文化をその空間的分布現象に於いて研究する科學である。」（總論、一三頁）と多少の變化が見られるが、これは「總論」の他の個所（例へば三三頁、又は六八―七〇頁等）で地域的個性研究が斯學の任務たることを述べて居られるのに鑑みれば、むしろ當然の變化であり、その意味で本書の定義は、この著者のものとして一層完成された定義と云はれ得る。

右の「定義よりして經濟地理學の任務は自ら決定されるのである。即ち經濟地理學の任務は地表空間が夫々特異の經濟的個性を有し、獨自の經濟的機能を發揮する事によつて地的統一（即ち相關聯するすべての地域間の統一――小島）をなし、かくして人間の經濟的文化が空間的に構造聯關をなし、地域編制を形成せる事を明かにするに在る。」（五二―三頁）と述べられる。換言すれば、第一に地域的個性の地盤たる地域を明かに劃定すること、第二に斯かる地域的個性の構造を分析觀察すること、第三に地域的編制を研究することであつて、この第三の任務は、私の理解するところに從へば、國民經濟・國際經濟等の地域的組成の研究である。

第二編は殆ど全部新しく書かれた部分であり、經濟地理學的研究に際しての各種指導原理を簡潔に紹介論述する。その中で地域論及び立地論の二を以つて最も根本的な意義を持つものとされ、景觀論には補助的意義を認め、自然本位論（自然環境論・相關論・地人一體論を含む）を否定される。これ等の他、人間本位論なるものも紹介されて居るが、これに對して批判は與へられてない。而してこの章で最も注目すべきは、著者が地域論と立地論とを結合せしめて新しい說を樹てられたことである。それは即ち「中心經濟地理學理論」（九九頁）又は簡單に「經濟中心論」（一〇〇頁）と稱せられるもので、著者に從へば地域論が經濟地理學の根本的指導原理たることは云ふまでもないが、「今日の如く凡べての舊體制が崩壞し始め、新しき原理によつて再編成されつゝあり、而かもそれは國內のみならず、世界全體に亘つて新秩序が誕生しつゝある際には、經濟地理學は單に『かくあり』といふ立場より轉じて『かくあらざるべからず』との立場に進みその理論の基礎づけをなさんとすれば、立地論に俟つの外はない。」（九八頁）そこで「一定の經濟體（經濟地域の意か――小島）の中心を種々の方法によつて定立し、更に之を中心として多くの小地域を劃定してその中心を定立し、かくして全體と部分、一般と特殊との關係に於て、經濟的空間の研究を完成する事が出來、同時に從來の地域論と立地論とを結合せしむる事が可能である。」（一〇〇頁）と主張される。著者はこれを以つて「經濟地理學の最も有力なる方法」（一〇〇頁）と自負して居られるが、第一編で明かにされた斯學の本質に對する著者の見解、即ち斯學を以つて實用の學問とする見解に照應する方法として考へられる限り、正に最も有力なる方法であることは承服出來やう。

次に第二章に於いて、研究の作業方法として、推理的方法（分類・類型化・類推・發生論・演繹・孤立化・辨證法）解釋的方法（因果的・類推的・反對的・批判的・連繫的・傍證的）表現的方法を紹介し、その夫々の意義を考察される。

第三編は「經濟地域劃定論」であつて、先づ第一章に於いて地域劃定の意義を論じ、第二章以下に自然的地域・文化的地域・經濟的地域の諸種標準に依る劃定方法が紹介されて居る。これまた「日本經濟地理學」以來、私も大いに稗益される所のあつた部分で、しかも今また全部に亘つて書直され、新しい材料が多く加へられて居る。而してこの編で注目を惹くのは、著者が地域劃定の意義を論じてゝ歷史學に於ける劃期、地理學に於ける地域劃定は、その研究の出發點にして且つ終極點であると共に逆に終極點なるが故に出發點である。前提手段と目的との自己同一である。前提手段と目的との自己同一なるが故にこそ、地理學的研究が無限に行はれうる」（一三一―一二頁）と云はれたこと

である。

第四編は經濟地域の個性形成の要素及び條件の分析とその夫々の意義究明に充てられて居る。即ち地域的個性の分析的研究の理論である。こゝで著者は「從來の經濟地理學に於ては、或は地域論にしろ、或は經濟現象の分布論、更には立地論にしろ、その地理的特異性の形成を論ずるに方り、要素と條件とが混同され、同等に取り扱はれて居る余も亦舊著に於ては之が區別をなさずして、經濟的要素、自然的要素、文化的要素といへるが如き區別をなしたるに止るが、これは論理的に見て明かなる誤謬である」（一八九頁）と率直に從來の主張を取消し、「一定の經濟地域に於ける經濟的なる諸現象は即ちその地域の構造要素にして、之なくんば經濟地域そのものが成立し得ない。之に反し經濟外の諸文化現象及び自然現象は、經濟地域の構造の各部分に對し、又その形態、樣式等に對しては頗る重要な影響を與へるが、經濟地域そのものの構成要素ではなく、條件にすぎない」（一九〇頁）として居られる。そこで要素として（一）經濟的指導原理（二）經濟組織（三）勞働組織（四）人口及び聚落（五）富及び生產手段の種類、集積狀態（六）財貨が生產より消費に至る迄の諸過程（七）交通及び通信制度を擧げ、文化的條件としては（一）政治組織（二）社會階級制度（三）社會的結合關係（四）民族的文化能力を、自然的條件としては（一）氣候（二）土地（三）水利（四）災害を擧げられ、これ等の意義に就いて一々周到綿密な論述を行つて居られる。

最後に第五編に至つて、經濟地理學の第三の主要課題たる經濟地域編制を取上げ、先づその原理を考究される。地域編制とは各地域が獨立の個性・獨自の機能・獨自の給付能力を持つことに依つて相互に連繫し、そこに生まれる地的統一體たる組織を云ふ。（二九三頁）それは、封鎖的家內經濟時代・都市經濟時代・資本主義時代・統制經濟時代の夫々に於いて、相異なる原理の上に立つ。第一の時代は各地域が殆ど同質であり、從つて地域的分業も殆どなく、地域的編制も極めて限られた範圍にしか存しなかつた。その範圍內の僅少な物資の交換は原費法則に依るものでなく、他の地域に絕對的に存在せざるものに就いて、或は贈與調貢の形に於いて或は鬪爭掠奪の形に於いて行はれ、從つて繼續的ではなかつた。第二の時代には强大な權力が現れ廣大な地域をその支配下に置いた爲めに、各部分が始めて獨自の機能を發揮して權力者に貢獻することとなつて、こゝに地域的編制が生ずる。殊に都市對農村の地域的分業が發達する。然し乍らまだ一般には地域的分業少く、各地域は先づ自體の必要物資を生產しその余剩を交換するに過ぎなかつた。然るに資本主義時代に入ると、一國內には完全な地域的な編制が生じ、國際間にも或る程度まで地域的編制が現れる。この時代には「國民經濟の內部に於ては、各地域は原則として絕對的原費の法則（absolute cost theory）が地域編制の根柢的原理であり、國際間の如き地域編制の不完全なる場合には、相對的原費の法則（comparative or relative cost theory）に基くのである。」（三一〇頁）然るに統制經濟の時代に入ると、貨幣が經濟の統制者たる機能を失ひ、國家的自給自足の原則に依つて國民經濟が營まれるに至り、國家の需要を充足する爲めには、必要なすべてのものを生產過程・再生產過程へ轉入せしめる。そこで「再生產過程に志向する合理主義」（三二六頁）が新經濟原理として現れる。國內的には地域的分業が最も合理的に絕對的原費の法則に依る生產擴大に志向する。世界的な地域編制は解體し、ブロック經濟・廣域經濟が要求される。而してブロック的廣域經濟內の地域編制の原理は、國內に於けるが如き完全なる絕對的原費法則でもなく、さりとて自由貿易時代の相對的原費法則でもあり得ない。「それはこの兩者を止揚した國民的需要充足の原理ともいふべきものであらう。」（三二九頁）

次に著者は農業及び工業の夫々に就いての地域編制をチューネンの「孤立國」及びアルフレッド・ウェーバーの工業立地論に據つて論述して居られる。著者は地表全體の經濟に對する地域編制・ブロック經濟に對するそれを含め

たすべての地域編制の根幹をなすものは國民經濟の地域編制であるとし、「故に本書に於ては國民經濟に於ける各經濟地域が如何に編制せられるかを中心問題とする。又國民經濟の地域編制を研究主題とするのであるから、各地域の個性を綜合的に觀察し、その全體に於ける意義を究明するに力めねばならぬけれども、之は最後の到達點であつて、それ迄には個々の經濟現象のみにつきて孤立的に地域編制の理論を定立し、更に之を現實化して、國民經濟に於ける經濟地域を劃定し、その編制の意義を明かにするの必要がある。」（二九七頁）そこで農業及び工業が先づ取上げられ、最後に國土計畫論に進まれる筈であつたが、頁數の關係からそれは割愛された。（序文）

以上本書の內容をその要點に就いて紹介したが、これに依つて本書が如何に新鮮味に溢れ、また如何に廣汎な範圍にわたつて重要問題に觸れて居るかゞ略ゞ明かであらう。まことに量質ともに、本邦經濟地理學理論に於ける最も重要なる勞作と稱するを憚らない。「日本經濟地理學」以來五年毎に新著をものされて居るが、博士の倦むところなき精進に依つて、今後五年或はそれ以前に、更に如何に完成された理論が生み出されるか非常に待望される。

最後に私として讀了後に若干疑問を生じた點があり、その解決が斯學の進歩の爲めに必要だと考へるので、不遜をも顧みずこゝに述べてみるならば、先づ第一に博士は、斯學を以つて國家的要求に應ずる政策學の一つと解すべきだとされて居るやうに見受けられる。若し果して然りとすれば、政策學と別個に實證科學としての經濟地理學は存立し得ぬものか、存立する必要がないものか。私としても「經濟地理政策論」の可能なることを信じて居り、國土計畫及びそれに到達せざるまでも例へば國內各地への土木事業の配置・國內植民事業その他產業部門の配置に當つての基準を研究すべきものと考へて居る。然し乍ら實證科學としての經濟地理學の進歩があつてこそ、斯かる政策學が可能となるのではなからうか。而して博士が斯學に與へられた定義は、政策學たる性質を現じて居らず、從つて實證科學としても存立し得るものと解さるべきであらうか。第二編に述べられたやうな地域論と立地論とを結合せしめた新しい指導原理も、若し地域性形成の要因として立地原則の作用を考察するといふ意味ならば首肯し得るが、地域的配置を統制するが爲めに研究するといふ意味ならば、實證科學としての經濟地理學の指導原理としては承服し難いやうに思はれるのである。

第二には經濟地域劃定を以つて出發點であり同時に終極點であるとして居られることへの疑問である。私の考へるところでは、地域的個性の研究は一個人の個性の觀察も甚しく異なる性質を持つ。それは即ち個性の地盤たる地域が、一個人の如く必ずしも常に與へられてない點である。然し乍ら博士の考へて居られる「地域」は斯かるものでないのかも知れぬ。即ち人間の個性觀察の際の一個人の如く與へられたものなのかも知れぬ。斯かる疑問は、或は私の理解力が不十分なのかも知れぬが、博士の「地域」なるものの說明も十分とは云へぬのではあるまいか。

第三に、經濟地域構造の要素と條件とに關する疑問がある。經濟地域とは一地域の經濟全部門を含む意味のものがあり、經濟の或る一部門に就いてのものもあることは、博士も認めて居られると思ふ。何となれば、國內各地域の農業上或は工業上の個性發揮の上に農業上或は工業上の地域編制が成立つことを認めて居られるからである。故に一產業部門の地域的個性が研究される場合には、その產業部門外の經濟現象は要素とならないやうに思はれる。

第四には地域的編制の理論を以つて地域劃定の理論及び地域的個性分析の理論と同格の重要性を持つものとされる（前に引用した五二—三頁の斯學研究の任務に關する一節參照）ことに疑問がある。私には博士の與へられた定義から斯かる任務の自ら決定される事情が理解されない。地域的個性は他地域との關聯に於いて形成されて居るものだから、從つて他地域の個性延いては博士の所謂地域的編制を個性形成の條件の一つとして考察せねばならぬ。然

黒正巖著「經濟地理學原論」

し乍ら經濟の地域的組成の問題は、博士の定義に於けるが如き經濟地理學にとつては本來の問題ではないであらう。即ちそれは、地方經濟・國民經濟・國際經濟又は世界經濟を研究する經濟學の諸部門の課題であり、同時に經濟地理政策論に於いて取上げられる課題であるやうに思はれる。

第五には、第一編第二章冒頭の次の如き文章の意味が理解されない。即ち「經濟地理學の成立が極めて最近の事に屬し、且つその研究對象が、經濟と自然といへる概念的に全く別個の範疇に屬するものなるが故に、之を統一綜合して一元的に取扱ふ事は方法論的に頗る困難であり、強ひてこの異れるものを一元的ならしめんとすれば、經濟哲學又は歴史觀となり、經驗科學たるの地位を逸脱するの虞なしとせず。かくの如き事情にあるが故に經濟地理學はその研究方法、任務、定義等その本質を闡明すべきものにつきて未だ定説を見ざる狀態に在る。」（二九頁）といふ一節である。經濟地理學の研究對象が經濟と自然であると云はれるのは如何なる意味に於いてであらうか。而してこの文章では、この兩者を研究對象とするが爲めに斯學は必然に二元的でなければならぬといふ意味に解されるが、恐らく博士は斯かることを云はれるのではあるまい。（日本評論社發行、本文四一〇頁附錄文獻要覽一五頁、定價四圓）

前號（第三十五卷十月號）目次

出生減の原因と對策の基調……寺尾琢磨

統制經濟下に於ける會計學の一問題……小高泰雄

戰爭本質論の一研究……加田哲二
——クラウゼヴィッツの戰戰爭論を中心として——

イー・グブルユー・エッカード教授著『ダブルユー・エス・ジェヴォンズの經濟學』……高橋誠一郎

購讀料
一部　金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
半ヶ年分　金貳圓九拾錢　郵稅金九錢
一ヶ年分　金五圓四拾錢　郵稅金拾八錢
（停）

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所へ
營業に關する用件は發賣所へ
原稿締切期日は發行前月十日

昭和十六年十月二十五日印刷納本
昭和十六年十一月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十五卷第十一號

編輯兼發行者　東京市芝區三田慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子活版所

發行所　東京市芝區三田慶應義塾內　理財學會
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發賣所　東京市芝區三田二ノ一　慶應出版社
（電話三田（芝）二七九一番　振替東京一五八一八〇番）

購讀申込は慶應出版社へ